様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３２３８

研究課題名（和文）日本語を第二言語とする話者同士のコミュニケーションの研究

研究課題名（英文）A study of communication between second language speakers of Japanese

研究代表者
大津　友美（Otsu, Tomomi）

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授

研究者番号：２０４３７０７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：留学生30万人計画などの影響で、日本の大学では多様な背景を持つ留学生が増え、第一言語を異にする留学生同士が日本語を使って話をする機会が増えてきている。日本語を第二言語として話す者同士のコミュニケーションは職場などでも増えつつあり、日本語は、もはや日本語母語話者だけのものではなくなっていると言えるであろう。本研究では、大学生の会話場面に焦点を絞り、友人関係にある留学生同士が雑談する場面、授業中に話し合いをする場面での会話参加者のふるまいを分析する。また、日本語母語話者と日本語第二言語話者との会話との比較も行い、場面ごとの日本語第二話者の行動の違いを記述する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、これまで研究の対象として中心に据えられてこなかった日本語第二言語話者同士の会話を分析する点である。日本語で会話する外国人も増え、もはや日本語は母語話者だけのものではない。本研究はそのような観点から日本語コミュニケーションの諸相を論じるための第一歩を踏み出そうとするものである。また、現在、外国人のコミュニケーション行動について語られる時、どうしても日本人のやり方に照らし合わせる形での評価になってしまうが、本研究の成果によって、外国人の日本語コミュニケーションに対する社会の新しい見方に寄与し、ひいては多文化共生社会の実現に貢献することができるのではないであろうか。

研究成果の概要（英文）：The number of international students on university campuses in Japan has increased, and it is now quite common for international students of differing cultural and linguistic backgrounds to talk to each other in Japanese as their second language. Second language conversations in Japanese are also increasing in the workplace and in local communities. The purpose of this study is to analyze the conversations between second language speakers of Japanese. It focuses on conversations by international students on university campuses. The discourse of casual conversations between friends and in-class discussions between students during Japanese language classes are scrutinized and the features of second language conversations are described. The influence of genre difference is also discussed. Conversations between international students and Japanese students are also analyzed so that comparison can be made to the features in conversations between second language speakers.

研究分野：談話分析、日本語教育

キーワード：第二言語としての日本語　談話分析　会話の仕方　雑談　話し合い　ディスカッション　留学生

１．研究開始当初の背景

留学生 30 万人計画などの影響で、日本の大学では多様な背景を持つ留学生が増え、第一言語を異にする留学生同士が日本語を使って話をする機会が増えてきている。在留外国人数は依然として 200 万人を超えており、日本語を第二言語として話す者（以下は L2 話者）同士のコミュニケーションは職場でも地域でも増えつつある。日本語は、もはや日本語母語話者だけのものではなくなっていると言えるであろう。しかし、日本語母語話者（L1 話者）同士、または L1 話者と L2 話者とのコミュニケーションの研究が数多くなされ、その実態が解明されつつあるのに対して、L2 話者同士の日本語コミュニケーションの研究は十分に進められているとは言い難い。L2 話者同士の会話を中心に置き、その特徴を明らかにする研究を行う必要があるであろう。

２．研究の目的

前節で述べた研究の必要性から、本研究では実際の会話場面での会話参加者のふるまいを分析することにより、L2 話者同士のコミュニケーションの一側面を明らかにすることを目指す。その目的を果たすために、今回の調査では大学生の会話場面に焦点を絞り、友人関係にある留学生（L2 話者）同士が雑談する場面、授業中に話し合いをする場面を録音・録画した。また、L2 話者同士の会話と比較するために、留学生とその友人である日本人大学生（L1 話者）が雑談する場面も収録した。それらの談話をマイクロ分析することによって、場面ごとの L2 話者の行動の違いを記述する。さらに、分析結果を整理した後、日本の職場や地域でのやりとりを含め、今後リンガフランカとしての日本語を用いたコミュニケーション研究をどう進めていくのが良いか、その研究手法、研究範囲の拡大を検討したい。

３．研究の方法

本研究で用いるデータは、表 1 に示した 3 種類の会話である。そのうち、〈会話 1〉と〈会話 2〉は、大学キャンパスで行われた親しい友人同士の雑談である。それぞれ 20 組（各組約 30 分～60 分）ずつ、録音・録画した。〈会話 1〉〈会話 2〉で会話参加者となった L2 話者は、大学生や大学院生だけでなく、交換留学生など様々な目的で日本の大学で学ぶ学生が含まれる。一方、〈会話 1〉で会話参加者となった日本語 L1 話者は、日本の大学で学ぶ学部生・大学院生である。OPI（Oral Proficiency Interviews）あるいは留学生の所属教育機関での評価によると、L2 話者の日本語口頭能力は初級前半～上級後半である。自然に発生したコミュニケーション場面のデータを収集するため、会話参加者の属性（性別や出身地など）や滞日期間の統制はしなかった。

〈会話 3〉は学習場面での留学生同士の話し合いのデータである。話し合いの種類は様々で、ブレーンストーミング型ディスカッションを 4 組、問題解決型を 8 組、賛否両論型を 1 組分収録した（各組約 10 分～15 分）。参加者は、中級後半の日本語クラスで学習中の留学生、または中級後半の学習を終えた直後の留学生である。会話参加者の性別や出身地、留学の目的、 滞日期間は様々である。

表１：会話データ

	会話参加者	総数
会話 1	親しい友人同士である留学生（L２話者）と日本人学生（L１話者）の日本語による二者間の雑談	約 30 分～60 分の雑談 各 20 組
会話 2	親しい友人同士である留学生（L２話者）同士の日本語による二者間の雑談	
会話 3	日本語授業中の留学生（L2 話者）同士の日本語による話し合い（ブレーンストーミング型、賛否両論型、問題解決型ディスカッション）	約 10 分～15 分の話し合い 13 組(各 3～5 名)

〈会話 1〉と〈会話 2〉については、会話分析の手法を用い、韻律の変化や声の調子、ポーズ、笑いなどの微細な特徴に注目しながら、分析する。そして、発話順番取り、発話連鎖、コミュニケーション上の問題解決といった基本的な会話の進め方や対人関係の構築・維持にかかわる会話行動が、会話参加者の一方が L1 話者である場合と比べ、L2 話者同士の会話では、どのように異なるのかという観点から考察を行う。〈会話 3〉については、「雑談」「ディスカッション」といった談話ジャンルの違いによって、L2 話者同士の会話の様相がどう異なるかを検討する。特に、話し合いの課題、活動の環境、成果物として求められるものの条件といった観点から、発言内容や談話展開に注目して談話分析を行う。

４．研究成果

本節では、本研究課題の成果について、研究の主な成果を報告し、その学問的意義と今後の展望について述べる。

(1) 雑談における L2 話者同士の会話の特徴：コミュニケーション上の問題への対処方法

会話においては、相手の話が聞き取れない、理解できない、自分の言いたい言葉が出て来な

いといった、会話進行を阻む可能性のある問題が生じることがある。L2 話者が会話に参加する際、その相手が L1 話者である場合と比較し、相手も L2 話者である場合には、互いに使用可能な日本語資源が限られている等の理由から、自ら主導してそのような問題の解決を図ることがより必要となる。本稿では、そのような場面に見られる L2 話者の行動として、①スマートフォン（以下は「スマホ」）の辞書アプリを使用して言葉を調べたり、ウェブ検索したりすることと、②英語への切り替え・英語表現の混用について、友人同士の雑談の分析の結果を報告する。

① スマートフォンの使用（大津，2018）

相手の話の中に自分の知らない言葉があれば、辞書アプリ等を使ってそれを調べたり、自分が言いたい言葉が見つからない時には求める言葉を探したりすることがある。しかし、スマホ画面を見ることで相手から視線を外したり、操作の間に沈黙が起こったりすることになり、それがスムーズな会話進行を妨げる可能性がある。L2 話者はそのようなスマホ使用によって起こる問題にどう対処し、会話とスマホ使用の両方を同時に成り立たせているのであろうか。発話の微細な特徴とともに、会話参加者の視線や手の動きなどにも注目しながら、親しい友人同士である留学生同士の日本語による二者間の雑談を分析したところ、次の二つの方法で、上記の視線と沈黙の問題に対処していることがわかった。

相手の発話中に意味のわからない言葉があってスマホで言葉の意味を調べる場合、相手から視線を外し、スマホの画面に視線を落とすことになってしまう。それでもしっかり話は聞いていること、わからない言葉を調べるためにスマホ操作をしているのだということを伝えるために、L2 話者はスマホ画面に視線を落としながらも相手の話を聞いてうなずく、視線を時々一時的に相手に向けるということをしていることがわかった。また、自分が目下調べている言葉をはっきりと相手に聞こえるようにつぶやくことによって、当該の会話とは無関係な理由でスマホ画面を見ているのではなく、相手の話を理解するためにスマホ画面を見ているのだということを言語的にも相手に伝えるという方法を取っていた。

一方、発話中である会話参加者の方も、そのような相手の行動の一つ一つの意味を理解した上で、どうしても相手にスマホ操作をやめて視線を向けさせたい場合には、明らかに発言の途中であることがわかるタイミングで話すのを中断し、相手の注意を引くという方法を取っていた。また、相手が地名や人名など、辞書アプリを見ても出て来ないような語を調べ始めた時には、その旨を明示的に伝えることによって、スマホ操作を制止する例も見られた。

② 英語への切り替え・英語表現の混用（大津，2019）

日本語授業中の活動などでは、L2 話者が言いたいことを日本語でうまく表現できない時や自分の意図する意味を表現するための日本語の言葉を知らない時などは、別の日本語表現に置き換え、できるだけ日本語だけで会話を進めることが奨励されることが多いのかもしれない。しかし教室の外で、友人同士などで会話するときには、会話を楽しんだり、実生活に関わる情報交換を行ったりすることがコミュニケーションの目的となる。そのため、効率的、効果的にその目的が達成されるのなら、英語への切り替え・英語表現の混用も少なからず行われる。

そのような会話を観察すると、日本語で会話が行われる中で、英語表現が混用されたりしても、L2 話者の間では、特に混乱が見られることはなく、スムーズに会話が進んでいくことに気づく。経験の浅い日本語教師が直接法で日本語を教える授業の中で英語を挟んだ時に、学習者にそれが英語であることすら伝わらなかったり、地域社会の中で日本人が外国人に何かを説明する中で英語を混用しても意図したようにはスムーズなコミュニケーションにはならなかったりするのとは対照的である。なぜ、L2 話者同士では、そのように効率的、効果的に英語への切り替え・英語表現の混用が実現されているのであろうか。L2 話者同士の雑談をデータとし、英語への切り替えや英語表現の混用が、どのような状況で、どう行われるのかを観察したところ、次の三つの特徴が見られた。

まず、会話全体の流れの中で、どういう局面で英語への切り替え・英語表現の混用が起こるかを調べた。その結果、それは主に、相手に聞き返されたために元は日本語で発した言葉などを英語に置き換える場合と、自分の発話中に言いたい言葉が何らかの原因で出て来ず、代わりに英語で表現する場合に限られて起こる現象であることがわかった。つまり、会話参加者にとって、英語への切り替え・英語表現の混用はいつ起こるかわからないものではなく、パターン化され、生起予測が可能なものであると言える。

次に、日本語での適切な表現ができず英語を使用する場合には、①会話参加者が何らかの産出の困難に直面していることや言葉探しをしていることを言語的に示す、②英語使用中に身振りなど非言語的な行動を伴わせることにより、相手の注意を引いているのが観察された。これらの行動により、相手に何か特別なことが起こっていることが伝わり、聞く構えを取らせているのではないだろうか。会話参加者はすぐに英語に切り替えるのではなく、まずは日本語での発話産出を試みる。そして、その後に、「何（ていう）」「How do I say」のような表現を用いて、言葉探しをしていることを言語的に示した上で、英語に切り替えていた。また、英語表現を使用する際に、特徴的な身振りや姿勢といった非言語行動が見られた。これは、英語によって伝えようとしている意味が、より正確に相手に伝わるような工夫であると考えられるが、それだけでなく、その時点まで日本語を基本的な使用言語として進めてきたコンテクストとは異なる、特別なことが起こっていることを相手に伝える効果もあるのではないだろうか。例えば、英語

での発話を行う最中に机上の手を左右対称に動かしたり、実際に操作はしないが、自分のスマートフォンに手をかけるしぐさを見せたりすることもあった。

（2）学習場面における L2 話者同士の会話の特徴：課題の特性や学習環境の影響

会話参加者が自由に話題を選んで話せる雑談とは異なり、授業内では話題や課題が指定されたり、使用できる道具を含めた学習環境についても教育機関側に決められたりする。L2 話者同士の会話は、そのような課題や環境からの影響を受け、日常会話とは異なる特徴を持つことが予想される。本稿では、そのような学習場面での L2 話者の会話の特徴のうち、①ディスカッションでのやりとりが課題の特性の影響をどう受けるかということと、②画用紙やサインペンが用意され、ディスカッション中に「書く」ことが期待された場合に、それらの道具が話し合いの成果にどう影響を及ぼすかということについて、分析の結果を報告する。

① 課題の特性の影響（工藤・大津，2018）

日本語の授業の中でよく行われる典型的なディスカッションの型に「賛否両論型」と「問題解決型」がある。それぞれの型の話し合いの談話を分析したところ、賛否両論型と問題解決型とでは、次のような課題特有のやりとりの特徴が観察され、課題遂行に寄与するということが分かった。賛否両論型においては、①教科書にはない新たな視点を持ち出し議論する、②自分とは意見の異なる相手の立場に立って相手の意図することを言語化する、ということが課題遂行に有効であった。それに対して、問題解決型では、①発話内のキーワードからアイデアが誘発され、それらのアイデアを関連づけながら協働で提案を具体化する、②与えられた状況設定を取り込みながら現実的な提案を生み出すことによって、実り多い話し合いが実現されていた。

② 「書く」という行為の影響（工藤・大津・熊田，2019）

授業内のディスカッションでは、しばしば教師側から、話し合い内容の整理のためなどに便利な道具が渡されることがある。例えば、皆で論点を整理し可視化するために使われる模造紙や画用紙、付箋紙、サインペンなどである。L2 話者同士の話し合いの談話を分析したところ、こういった道具が話し合いの進行を補助するという教師の狙いに反して、会話参加者間のやりとりに問題を引き起こすこともあるということがわかった。ブレーンストーミング型の話し合いの後の成果発表において内容的に不十分であるとされたグループの話し合いについて、画用紙の使用、「書く」という行為に着目して分析したところ、①「何を」よりも「どう」書くかに注意が向いている、②書きやすい言葉を採用する、③発想を広げるきっかけとなり得る発話を逃してしまう、といった問題行動がそれぞれ複数回、観察された。もちろん「書く」という行為が話し合いの成果に良い影響を及ぼすこともあるが、L2 話者の日本語習熟度や話し合い活動の経験の有無によっては、画用紙などは使用しないで、意見を述べること、相手の話を聞くことに集中したほうが実り多い話し合いが実現できることもあるのであろう。

（3）L1 話者と L2 話者の会話の特徴：スムーズな会話を実現させるための L1 話者の工夫（大津，印刷中）

L2 話者同士の会話との比較のため、L2 話者と L1 話者が参加する会話の分析も行った。本稿では、そのうち、L2 話者が日本や日本語に関する質問をし、L1 話者がそれに応答する場面での L1 話者側の工夫について、友人同士の雑談を分析した結果を報告する。

異なる言語や文化的背景を持つ L2 話者と L1 話者であっても、友人関係にあるならば、大学生活、趣味、共通の知人といったことが話題になるであろう。しかし、その一方で、両者の日本での生活経験や日本語習熟度などの差から、日本社会や文化、日本語に関する事柄が話題となり、両者の言語・文化的差異が前景化するような状況もあると考えられる。その一つが、L2 話者が日本や日本語に関する質問をし、L1 話者がそれに応答する場面である。L1 話者は、相手にわかりやすいように応答にどのような工夫をしているのか、また、即答できない場合にどのように対処しているのかということについて考察した。

分析の結果、まず、L1 話者と L2 話者では、日本や日本語に関して持つ背景知識に、質・量ともに差がある。そのため、L1 話者は、L2 話者が間違った知識に基づいて質問をしていないか、また質問に応答する際に自分が前提としている事柄が L2 話者にも共有されているかを、相互行為の中で観察しながら敏感に反応していること、その際 L2 話者にとってわかりやすいように言葉の運び方、非言語資源との組み合わせを調整していることがわかった。

次に、L1 話者が L2 話者に比べ、日本や日本語に関する知識を多く持っていたとしても、L2 話者の質問に対して、求められたとおりの適切な応答ができない時もある。L1 話者はそのような場合にどう対処しているのであろうか。L1 話者は推測などに基づいて何らかの答えを出そうとするかもしれないが、その結果、L2 話者に間違ったことを教えてしまうおそれがある。また、自分が考えたこともないことについて意見を求められたり、経験のないことについて情報提供を求められたりした時などは、推測した内容さえ言えないこともある。そのような難しい状況に際し、L1 話者は、発話の際に「～かもしれない」「～かな」といった表現などを用い、応答内容があくまで個人的な推測にすぎないことを表示したり、自らの応答が、ある条件の下に出された一時的な答えであり、条件が変われば、答えも変わることを付言したりしていた。また、自分自身で L2 話者の質問への答えの候補すら挙げられない時には、相手に代わりに候補を挙げ

させたり、自身の応答能力の欠如をはっきりと主張したりするのも観察された。

（4）本研究課題の学問的意義と今後の展望

本研究ではL2話者同士のコミュニケーションの一側面を明らかにすることを目的に、大学生の会話場面に焦点を絞り、友人関係にある留学生（L2話者）同士が雑談する場面、授業中に話し合いをする場面のやりとりを分析した。本研究課題の学問的意義は次の2点である。

第一に、日本語は母語話者だけのものではないという立場を取り、L2 話者同士のコミュニケーションを研究対象にしたことである。L2 話者の参加する会話に関する従来の研究では、L2話者が L1 話者と話をする状況でのコミュニケーションが研究対象とされてきた。そして、L1話者同士の会話を基準としたときに、L2話者の行動がどうL1話者のそれと異なるか、また、L2話者の影響を受けてL1話者の行動がどう変わるのかが論じられてきた。その一方で、L2話者同士で行うコミュニケーションの特徴については、研究があまり進められてこなかった。しかし、実際には、日本の大学に留学したり日本の職場で働いたりする外国人が増加しているため、L2話者同士で日本語を使ってコミュニケーションをする状況は珍しいものではなくなっている。本研究は、L2話者同士の会話中の発話の細部にわたって観察し、微視的な分析をし、L1話者を相手に話すときとは異なる特徴を記述することにより、その一側面を明らかにすることができたのではないであろうか。

第二に、本研究は、リンガフランカとしての日本語によるコミュニケーション研究の糸口となるものと位置付けられる。在留外国人数は200万人を超えており、大学キャンパス、日本の職場、地域など、様々な場所で日本語やその他言語を用いつつ生活している。そして、異なる言語を母語として話す L2 話者同士が共通言語として日本語を用いてコミュニケーションを行う機会も増えてきていると思われる。

本研究課題では、大学キャンパスをフィールドとし、大学で学ぶ留学生同士の会話の中でも、カジュアルな雑談場面と学習場面での話し合いという二つの異なるジャンルの会話の分析を行った。今後は、職場や地域の交流活動の場など、様々なフィールドに出て、L2話者同士の相互行為の研究を行い、リンガフランカとしての日本語によるコミュニケーションの諸相を明らかにしていく必要があるが、一つのフィールド、同じタイプの会話参加者だとしても、複数のジャンルの会話を収集すること、そして、環境からの影響や各コンテクスト特有の要素を考慮に入れた質的研究を基本に、研究範囲の拡大等を検討していきたい。

〈引用文献〉

① 大津友美、日本語を第二言語とする話者同士の雑談の分析―スマートフォン使用が会話のし方にどう影響するか―、第51回日本語教育方法研究会、2018年9月8日、国士舘大学
② 大津友美、日本語第二言語話者による英語への切り替え・英語表現の混用、第52回日本語教育方法研究会、2019年3月23日、杏林大学
③ 大津友美、日本語第一言語話者は第二言語話者の質問にどう応えるか:大学キャンパスで行われた友人同士の雑談の分析、日本語語用論フォーラム3、査読無、印刷中
④ 工藤嘉名子、大津友美、異なるディスカッション課題における日本語学習者間のやりとりの比較―賛否両論型と問題解決型のディスカッションの場合―、日本語・日本学研究、査読有、8号、2018、51-64
⑤ 工藤嘉名子、大津友美、熊田道子、ブレーンストーミング型の話し合いにおける「書く」という行為の問題点、第52回日本語教育方法研究会、2019年3月23日、杏林大学

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

① 大津友美、日本語第一言語話者は第二言語話者の質問にどう応えるか―大学キャンパスで行われた友人同士の雑談の分析―、日本語語用論フォーラム3、査読無、印刷中
② 工藤嘉名子、大津友美、異なるディスカッション課題における日本語学習者間のやりとりの比較―賛否両論型と問題解決型のディスカッションの場合―、日本語・日本学研究、査読有、8号、2018、51-64
③ 工藤嘉名子、大津友美、問題解決型のディスカッションにおける学習者間やりとりと課題遂行の関係―問題のある提案内容に着目して―、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、査読無、44号、2018、1-17

〔学会発表〕（計5件）

① 大津友美、日本語第二言語話者による英語への切り替え・英語表現の混用、第52回日本語教育方法研究会、2019年3月23日、杏林大学
② 工藤嘉名子、大津友美、熊田道子、ブレーンストーミング型の話し合いにおける「書く」という行為の問題点、第52回日本語教育方法研究会、2019年3月23日、杏林大学
③ 大津友美、日本語を第二言語とする話者同士の雑談の分析―スマートフォン使用が会話のし方にどう影響するか―、第51回日本語教育方法研究会、2018年9月8日、国士舘大学
④ 大津友美、第二言語話者が参加する会話の研究、外国語と日本語との対照言語学的研究第

24 回研究会、2018 年 3 月 3 日、東京外国語大学

⑤ 大津友美、会話に参加するための能力を考える授業―第二言語話者が参加する会話の分析を通して―、第 11 回 OPI 国際Ｉシンポジウム、2017 年 8 月 5 日、台湾・淡江大学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。